

地蔵盆行事にみる地域の特徴 —福井県小浜市と京都府舞鶴市の事例から—

近石 哲[※]

はじめに

地蔵菩薩の信仰として説話的には、平安後期からの「三時思想¹」の一つである末法思想が盛んになったところに、浄土思想と同様に貴族間でこの思想が盛んになった。地蔵菩薩は、釈尊入滅後「弥勒仏²」が出現されるまでの間、「六道³」の衆生救済（教化）するために出現したといわれている。とくに死者が冥土に赴いて、地獄の閻魔の裁きを受け、ひどい苦しみに遭うことから救ってくれるのだと、固くまた深く信仰された。

この信仰は、やがて衆生（庶民）の間に流布するようになると、子安地蔵、身代わり地蔵、延命地蔵、とげ抜き地蔵等々と言うように変化して、教団をもたない「民間信仰⁴」として広く信仰を生むようになる。

時代は下り近世・近代において、仏教や神道等の制度化された既成仏教とは異なり、民間信仰（地蔵信仰）は村落共同体独自の民衆宗教であった。しかし、それらの信仰も戦後の都市における近代化（都市の一極集中による限界集落の拡大）や、少子高齢化および無宗教層の増大等により、現在は危機をむかえていると言わざるをえない。

その一方で「地蔵盆⁵」は、近畿地方を中心とする行事のなかで、少しずつ形を変えながら今日まで盛大におこなわれてきている。たとえば、行政と大勢の力で行われている、京都で夏に行われる大きな行事としては、「祇園祭り⁶」（七月）、五山の「送り火⁷」（大文字の送り火、八月）、そして各地域の町会が中心の「地蔵盆」があげられる。

小稿では、その町会が中心で、尚且つ今も盛大に行われている「地蔵盆」に着目し、若狭湾周囲の地域として、福井県小浜市内及び西津地区、さらには京都府舞鶴市で行われている地蔵盆の事例から、2011年度（8月22日～24日）の現地調査で得られた事を中心にして、その形態を少しずつ変えながらも伝承・継承されている「地蔵盆」行事の地域の特徴について、以下に報告方々考察を加えてみたい。

尚、この研究は、「行事内容の特徴」が調査研究の対象であるため、各事象が「地蔵祭」か「地蔵盆」の否かに関しての相違には触れることをひかえて、以下の論考では、すべて概念的に「地蔵盆」というように統一することとした。

小稿では、京都を中心として近畿圏で現在も盛大に行われている、各地域の「地蔵盆」行事

※神奈川大学歴史民俗資料科学研究科博士前期課程

を調査・考察することによって、その地域独特の「地蔵盆」行事が行われているのではないかという観点から、さらに地域独自の「地蔵盆」行事の伝承・継承を明らかにするため、調査で得られた結果と先行研究を参照しながら、各地域での行事比較を行う事によって、その特徴的な事柄が「地域の地蔵盆文化」と言えるのかどうかについて考察することを目的とするものである。

小稿は2010年度から始めた「地蔵盆行事にみる地域の特徴」での調査研究であり、『比較民俗研究第25号』に掲載された「京都の地蔵盆—京都市北区の事例から—」の続編でもある。

1 研究史と課題

前述の研究目的から、京都市以外の調査地域として小浜市と舞鶴市を特定した理由は、先行研究の少ない中で、「地蔵盆」行事の特徴を明らかにするために、①京都以外の地域で比較的先行研究があること、②畿内ではなく、京都市近接地であり文化の往来があったとされる、若狭湾に面した地域であること、③現在でも盛行で、尚且つ独特な地蔵盆（飾りつけや地蔵像の彩色）行事が伝承・継承されていること。

以上のことから、福井県小浜市と府下舞鶴市を選んで地蔵盆の調査・考察を行う事とした。次に、各地の先行研究をみる事とする。

若狭小浜での先行研究は、「地縁的祭祀の様態3 - 福井県小浜市下根来の事例から -」〔林英一 1993〕、「福井県小浜市尾崎の地蔵盆」〔宇野田綾子 2003〕、「地蔵盆と子ども集団」〔服部比呂美 2005〕の論考だけである。

刊行書は『化粧地蔵 こどもの神さま』〔牧田茂 1973〕に少し記載されている程度である。若狭湾に面した隣接地の、京都府舞鶴市と宮津市には各々の『市史』に簡単な記述があるだけで研究論文としては管見において見当たらない。

林の「地縁的祭祀の様態3」は、小浜市の下根来地区の祭祀について、地区のほぼ全ての信仰祭祀について詳細な調査を基にした重要な論考であり、尚且つ約20年前の貴重な調査資料の論考であるといえよう。が、この地域は現在「限界集落⁸」と化しているようである。

宇野田の、「福井県小浜市尾崎の地蔵盆」は、小浜市尾崎地区で新しく始められた「地蔵盆」を、始まった契機や行事内容の詳述と行事が生成していく過程の論考であるが、少子化・過疎化が進む将来の姿についての言及はない。

服部の「地蔵盆と子ども集団」は、地蔵盆の詳細とその司祭対象についての調査研究をされ詳細に言及されているが、西津地区中心の「地蔵盆」調査を事例としての「子ども集団」が中心の貴重な論考である。

この服部・宇野田の先行研究から、共通する事柄に地蔵盆の歴史（起源）・伝播とも考えられるような記述がある。それは『拾推雑話』：宝暦七年（1757）と『稚狭考』：明和四年（1767）から（詳細は後述）の記述からである。が、しかし、文献史料の引用で記述したものにしからざる。その文化（地蔵盆・祭）の起源を辿り、どのような伝播・流布を重ねたかということ

は、文化の変遷や地域行事の特徴を明らかにするうえでは重要な事柄と考えるが、いずれの先行研究もあまり踏み込んでの言及は少ないと言えよう。

地蔵盆の準備の中で特徴的で注目するものに、石仏の地蔵像に彩色を施している習俗があるが、この習俗も地域によっては、彩色はしない所と彩色はするが著しく異なる地域がある。

地蔵像の彩色に関しての先行研究は極めてごくわずかである。唯一の先行研究と言えるであろう『化粧地蔵』[牧田1973:149-210]では、彩色されている地蔵を「化粧地蔵」として各地での習俗(彩色)を捉えた論考である。しかし、その由来・成立・伝播等々にはふれてなく、論文というよりは紀行文的なエッセーであるような論考と考える。さらには、約半世紀前1973年の刊行書に掲載した論文であり、現在との比較考察に対して版を改めての言及はない。

地蔵の彩色に関して、京都を中心にした『京都民俗志』[井上 1933]の「習俗」の項に「地蔵尊を彩色する」[牧田1973:156]という章があるらしいが、1968年の『改訂京都民俗志』には、その章並びにそのような記述は見当たらない。

本稿においては、小浜・舞鶴での調査から、地蔵の「彩色」についても各地の特徴を明らかにしてみたいが、調査途中のため、彩色の発生や起源さらには伝播等々については、次号以下に試みることにしたい。

本研究とは少し離れているが、林英一の「明治政府の近代化政策と地蔵盆」[林 2008:105-119]は、「地蔵盆」という呼称の起源・発生・成立について、「地蔵祭り」と「地蔵盆」の相違等々の関連を近世から近代にかけてと、さらにはマチ部と非マチ部と、明治政府の、慶応4年3月13日(1868年4月5日)太政官布告(通称神仏分離令、神仏判然令)の「廃仏毀釈⁹」を交えての論を展開した論考であり、「地蔵盆」の成立に関して重要な資料といえよう。

小浜・舞鶴市での「地蔵盆」関連の先行研究を概観した結果、いずれの研究にも地域行事の比較(地蔵盆の祭祀や観念等々)に及んで詳述された論考は少ない。地域における行事の比較から関わりを明らかにして、小稿では、2011年8月に調査した「地蔵盆」の内容等々を「地域の特徴」として以下に述べてみる。

2 地蔵盆の諸相

若狭の地蔵盆

諸相の調査地域(福井県小浜市、京都府舞鶴市)を、若狭としてひとまとめにしたのは、この各地域は若狭湾の周囲に面していたのと、特に福井県小浜市は畿内(特に都)との文化が盛行に交流した土地で、文化色が色濃く残っていると一般的に言われている地域であり、尚且つ古くから独特の地蔵盆が行われていて、現在でも盛行に伝承・継承されている。府下舞鶴市は、小浜市に隣接地であるが城下町として栄えた地域である。やはりこの地域も独特の地蔵盆が行われている、以上の事よりこの2地域を「若狭」として捉えてみた。

2-1 福井県小浜市内及び西津地区の概要と地藏盆

①福井県小浜市内と西津地区の概要

福井県小浜市と西津地区の概要について簡単にみていく。

小浜市は人口31,679人・世帯数11,999世帯で、福井県の南西部、若狭のほぼ中央に位置していて、古代から日本海を隔てた対岸諸国との交易が開け、日本海側屈指の要港として栄え、陸揚げされた大陸文化や各地の物産は「鯖街道¹⁰」などを経て、近江、京都、奈良にもたらされた。大陸とのつながりは、市内に点在する数多くの文化遺産からもうかがい知ることができる。

地勢としては、北は国定公園の指定を受けた若狭湾に面し、海岸線の一部は「蘇洞門（そとも）」を有するリアス式海岸となっている。南は、東西に走る京都北部一帯に連なる山岳で、一部は滋賀県と境を接している。

また、日本海を挟んで朝鮮半島に向かい、昔からシルクロードの日本での玄関口として、京都・滋賀・奈良への大陸文化・南蛮文化の伝達の経路となっていた。さらには、北陸圏域の福井県にありながら、風俗、習慣、言語などは近畿圏域との歴史的・文化的つながりがあり、気候も概ね穏和・温暖である。[小浜市役所ホームページ概要 2011/08/1更新]

西津地区は人口3,362人・世帯数1,338世帯の、東は天ヶ城山から南方に延びる枝峰で限られ、北は甲ヶ崎、西は風光明媚な小浜湾に面する。地名の由来については、かつて港として栄えた小浜湾東岸の入江の最奥阿野尻（古津）の西の津であるところから西津と称されるようになった。市の中心部に近く交通の利便性もよく、住宅・商業地区として現在に至っている。[西津公民館から情報提供：2011/08/22]

②小浜旧市内の地藏盆 【写真1】

小浜市での地藏盆としては、調査地区の旧市内では8月23・24日の地区と土・日で行う地区があり統一しているわけではない。さらには、その市内で地藏盆が何箇所行われているのか把握はしてないということであった。

調査地の駅前町内会は、その名の如く小浜駅のロータリーから、左右の歩道を設け立派なアーケードがある、約1kmぐらいの商店街で周辺会わせて300所帯の町内会である。以下に、駅前町会役員〔岸野氏〕からの聞き書きを交えて述べる。

駅前商店街を含め小浜（旧）市内の路傍に安置されている地藏像は約37体であり、観光課のきもいりと平成17年4月に小浜小学校6年生の協力で、「御食国（みけつくに）若狭おばま願かけ地藏巡礼小路—お地藏さんマップ—」【写真2】を作成している。これは観光案内でもあり、地域活性化の施策の一つでもある。

地藏盆準備及び当日の式次第は、西津地区とほぼ同様であるらしいので、詳しくは西津地区の地藏盆で述べることにするが、旧市内の地藏盆等々について話を町会の役員から聞くと、「地藏盆の伝播は西津地区からである」と言うことらしい。[前出の岸野氏他1名] その理由らしきことは、「推定の域ではあるが、西津には『祇園祭り』が、京都から伝播されて今も行われている

るという事を考えると、地蔵盆も同様ではないかと言う事が、根拠らしきもの」であると話された。尚、地蔵盆についての資料（史料）は一切存在してないと言うことである。

この市内（駅前）の地蔵盆で、特に印象的な事柄であるが、この商店街も各地に見られる俗にいう「シャッター商店街」である。郊外の量販店の普及で売り上げが著しく減少する中、少子化の影響もあり跡継ぎがサラリーマンとしての職を求める昨今であるため、「寂しい限りだ」と役員の方野さんが話してくれた。地蔵盆は毎年欠かさず行っているのは、少子化とはいえ子どもがいるあいだは、先人からの伝承でもあるため続けて行くとの意気込みでもあった。

さらには市内の外れで、先頭に年長者と思われる子どもが賽銭箱を持ち、後続の子ども達が、太鼓や鉦を鳴らしながら各戸に勧進して、賽銭を集めに廻るところに出会った。子ども達の集団と少し離れてその子達の親と思われる方々がついて歩いていた。この賽銭の一部は、地蔵盆が終わった後の子ども達の「お小遣い」になると言うことであった。尚、この賽銭を集めることを、この地域では「勧進」と呼んでいる。【写真3】

地蔵盆開催地域が少ないので簡単ではあるが、以上が旧小浜市内での地蔵盆の特徴である。次に、地蔵盆の伝承が古くから伝わっていて、今も盛行に行われている小浜市西津地区の地蔵盆を見ていく。

ここでは今回の調査結果について述べることにするが、その大半は「聞き取り調査」によるものであり、旧市内同様に文字資料的なものはほとんど残っていない。

③小浜市西津地区の地蔵盆

以下、西津小松原区川西〔本村昭吾氏〕から聞き書き資料としてお話を伺い会場の御案内をして戴いた。

「西津の化粧地蔵～子どもたちの地蔵盆～」というマップ資料によると、この西津地区は12区に分かれていて、安置されている地蔵像は「37体」と地蔵盆会場は「31箇所」である。地区の数より地蔵像の数が多いのは、1体／区ではなくて例えば下竹原区などは地区の辻々に安置して合計6体であると言われる。〔若狭おばま食文化館資料マップ：2010/8/23日作成〕【写真4】

西津での地蔵盆の主体となるのは、組織的につくられた「子ども組¹¹」の存在であり、少子化とはいえ、現在でも西津でこの地蔵盆に関しては子供達を中心で行われている。その形態としては、明治時代のことからである。〔本村氏の先輩で船井三蔵氏からの伝承〕

古くは（昭和30年初まで）、男子だけで構成されていて年齢は14歳以下（中学2年）であった。現在は少子化のために、昭和30年過ぎから女子の参加も認めたが、最年長者は小学6年までと限定されていた。またこの集団は、年長者から「大将」「中将」「少将」というような軍隊的な呼称の階梯組織であった。この「子ども組」が地蔵盆祭祀のほとんどを執り行っていたということである。第二次世界大戦時も毎年欠かさず行っていたが「お堂」【写真5】を建てる事と紙で作った「五色幡」【写真6】と呼ばれる飾りつけは控えていた。（「お堂」と「五色幡」については詳しく後述する）やはり、時代的なことから派手な事柄は出来るだけやめようという各地区

の申し合わせだったらしい。尚、当局からの圧力はなかったらしい。

この「子ども組」について、今回（平成23年）の調査地の西津新小松原区火除町の地蔵盆で、「この子が今年で最後（14歳）なので、後は子どものいない地蔵盆だあ…」さらには「来年から町内会も80過ぎの女性が多くて飾りつけの力仕事は大変だあ…」「あと何年出来るかなあ…」と、地蔵盆すら危ぶまれると語られた。[町内会女性役員33]

次に、まずは地蔵盆の準備からであるが、お盆の前8月10日頃に、地蔵像を洗う井戸の底石を探しに行き（場所は対岸の仏谷海岸や小浜公園海岸）集めた石を井戸の底に敷く、これは古い石は穢れているので新しい底石を敷き清らかにするという意味合いがある（この事は、地蔵の彩色も同様であるらしい）。次に、「盂蘭盆会」が終わってから、地域の各辻角の祠に安置されている「石仏の地蔵」を取り出し、海に持って行きその彩色を洗い落とす。古くは、その後町内に持ち帰り井戸水で再度洗い清める。これはすべて子どもの仕事であるらしい。しかし現在では少子化で子どもがいなくなり、井戸も水道に変わったこともあって、地蔵の運搬等々は町会の役員が行っている。

石仏の地蔵を乾かしてから、各町会の子どもたちが、古くはベンガラや岩絵具で（群青・緑青・黄土等々）あったが、現在では絵具・油性ペンなどで自由な色を使って地蔵像に着色・彩色する。この地蔵を「化粧地蔵¹²」【写真7】と呼んでいる。最近では、地蔵を2体安置している町会が多く、「男地蔵と女地蔵」【写真8】としている。男地蔵のほうが大きくて、その彩色も派手に塗り、女地蔵は小さい石像で彩色も穏やかな感じを受ける。

尚、この「化粧地蔵」という地蔵像に彩色をする習俗は、前出の本村氏の話では「この西津の長老であった船井三蔵さんの時代からあったと聞いている」とのことであり、さらには「船井三蔵さんが存命ならば120歳以上であるから、明治23年生れ（1890年）かあ…古いなあ」と教えてくれた。しかし当時の彩色そのものが伝承して今に続いてかどうかは定かではないらしい。さらに準備で、「行灯」【写真9】や「五色幡」をやはり1週間前ぐらいから用意をする。「行灯」にはアニメ漫画などを描き、「五色幡」は白地に黄・赤・緑・青の順で貼り付けた和紙に、墨書で「南無地蔵大菩薩」と書いてある。幡づくりで墨書だけは親の仕事の場合もある。

この後は、21・22日に「お堂」を組み立てる。この部材は各町会が会館とか倉庫を持っていて、その会館や倉庫で保管している。この「お堂」の組み立てには力仕事であるため、町会役員等々（大人）が作業を行っている。「お堂」は、地蔵像を祀る祭壇を組み飾り付けるためと、地蔵盆前日から子どもたちが地蔵盆飾り等々を守るために寝泊りする場所として設置される。戦前は、各町内会で1箇所ずつ建てられたが、ここ何十年前からは少しずつ減り現在は「仲ノ町のお堂」と「七軒町のお堂」の2箇所だけになった。「お堂」が減りつつある原因は、子どもたちが少なくなり寝泊りする子がいなくなったり、「お堂」が火事とかで消失したり、老朽化して補修できなくなったり、高齢化して組み建てられなくなった等々である。

「お堂」がない町会は、現在では各地区に町会会館が建てられてあるので、個人宅ではなく、会館での祭壇・飾り付けを行っている。

地藏盆祭場の「お堂」や「会館」の前には竹笹（大きいのは5～7m）取り付けられて、この竹笹に「行灯」や「五色幡」、五色幡よりさらに大きな「白い幡」が取り付けられる。白幡には大将や中将がそれぞれの直筆で「南無地藏大菩薩」と各自の名前を書き込んで「大将幡」【写真10】としている。古くは22日の夜に、この大将幡の奪い合いの攻防と前述の行灯破りがあったらしい、この事については各先行研究で論じ詳しく言及しているので、詳述はさけるが、現在では一切行われていない。さらに、「賽銭の強要¹³」も同じようにこの西津地区においては中止しているということを書き加えておく。

筆者の調査日は、8月22・23日であったので、本村さんの地区である「小松原区川西」の「仲ノ町お堂」で22日の夜、泊まる子達に会った。子ども達の話ではこのお堂に泊まるのは、夏休みの楽しみの一つであり友達と騒ぐのがすごく楽しいと言うことであった。地区によっては、西津出身の親が子どもを連れて帰省しているらしく、大勢の子ども達で賑わう地区もあった。

尚、このお堂は全て「東向き」に建てるということであるが、その理由等々は不明である。

西津地区には地藏盆行事を明記した式次第（プログラム）はない。何十年も続いたものであるから、地藏盆の準備前に役員との打ち合わせで、行事内容が口頭で確認されるとの事である。

地藏盆当日である23日の行事は、朝早く（地区によっては6時過ぎ）から、子どもたちが太鼓や鉦を打ちながら「ナムジゾウー、ダーイボサツ」と繰り返し囃している。そして、前を行く人に「参ってんの・参ってんの」と呼び込んでいる。私も、お賽銭を上げて御参りをしたら、子どもたちが「あーりがとさん、あーりがとさん」と全員囃したてる。ちなみに、この調査の話者と御案内をして戴いた本村氏の小松原区川西では、子どもが男子3人・女子6人の9人であった。地域では一番多いらしい。【写真11】

10時頃と午後の3時頃には、子どもたちに「おやつ」が出る。夕方から夜にかけて、「念仏」が大人たちによって始まる。古くは「念仏講¹⁴」によるものであったが、「講」組織がなくなったので地域の役員やお年寄りによるものである。念仏の前に「お堂」の少し後ろ側で飲食を始めるが、途中から飲食の場に行く人がいたり自由な感じで楽しんでいるようである。

地藏盆も終わりに近くなり、子どもたちは学年別に分配されたお賽銭を貰って解散になる。このお賽銭もある程度は、来年の地藏盆費用の一部として積み立てておくらしく、残りを子どもたちに分配をしている。

あくる日（24日）の朝に祀っていた地藏は、地藏盆役員と年番（当番）により元の祠に戻し安置する。地藏盆後の地藏像や祠の管理は、町内で順番を決めて、週に一度当番が地藏像や祠の掃除・お花・お茶・お線香・お灯明をあげてお守り（管理）している。【写真12】

さらに役員等々で、お堂を解体（お堂がない地区は会館）整理して祭壇等々を、小屋（会館の中）に収納する。同時に、お供えを少しずつ各戸の分けて配る（これは大人の仕事である）。この供物配りとお堂（会館の祭壇）解体整理が終れば、その年の西津地区の地藏盆は全て終る。

新しく始めた行事に、2011年から西津地区「31箇所」地藏盆会場での「地藏盆コンテスト」を行っていると言う事である。主旨・目的は、この伝承を絶やすことなく後世に継承する事と地

域の活性化のため独自の「西津地蔵盆」を広く発信するため、「地域のコミュニティと発展」を主としての行事であると言う事である。さらには、少子高齢化という時代背景から、この伝統行事の衰退を危ぶんで地域住民の積極性を高揚させようという事も隠れた目的の一つである。「地蔵盆コンテスト」の審査内容は、地域連合の役員数名により、数項目で採点を行うというものである。項目については公表してないという事で不明であった。尚、「コンテスト」の順位はなく、優秀賞を数箇所選定する。

この「地蔵盆コンテスト」は、地域住民が主体的に行っている。コンテストの結果や地蔵盆に関する記事は、「西津公民館だより」に掲載して広く発信している。

2-2 京都府舞鶴市の概要と地蔵盆

①京都府舞鶴市の概要

舞鶴市は、88,275人（推計人口、2011年7月1日）市街は大きく二つに分かれており、軍港から発展した東舞鶴と、田辺藩の城下町・商港から発展した西舞鶴から構成されている。1943年6月26日以前からの舞鶴市に当たる西舞鶴を旧舞鶴市、1943年5月26日以前「東舞鶴市」だった東舞鶴を新舞鶴と呼ぶことがある（西舞鶴を便宜上「旧舞鶴市」と表記する場合がある）。

日本海に面し、東西に分かれた舞鶴湾のリアス式海岸を臨む都市である。舞鶴湾口を東西から博奕岬と金ヶ岬が固めた、天然の良港である。[舞鶴市ホームページ]

②舞鶴市の地蔵盆

舞鶴市での地蔵盆は、西舞鶴が中心で東舞鶴には地蔵盆の伝承はないらしい。舞鶴には『市史』等々の文献や先行研究からは「地蔵盆」に関しての記述がほとんどなく皆無と言ってもよいであろう。文字による伝承はないが、舞鶴の地蔵盆の祭祀には他の地域にない独特のものがある。（詳細は後述する）

まずは地蔵盆について、「ふるさと祭り 地蔵盆」というガイドブックの記述を紹介する。

古くは城下町として発展した西のまち。夏、お盆をすぎるとなると、まちのあちこちで地蔵盆が行われる。町や隣組ごとに「お地蔵」を守っているが、その歴史は古く、江戸時代から修復を重ねながらお地蔵様を受け継いで、現在に至っている町もあるとのことである。

準備はたいい前日の夕方か当日の朝である。初めのうちは「この飾りはどこやったかな」と確認する声も聞かれるが、年長者たちの指示もあって徐々にてきぱきとした動きになる。提灯や花、お菓子などのお供え物がいっぱいになると、ムードも徐々に盛り上がってくる。準備が整い、子どもたちが集まってきたら、お菓子の配布や福引などが行われ、夜の花火へと続く。「今は子どもが少なくなって…」と寂しげに話す年配のご婦人もあれば、「大人同志の親睦を深める機会になってます」と笑う男性もいます。

地蔵盆が行われている場所を一か所ずつのぞいていくと、ほとんどのところで金色の上

に彩色された厨子やお地藏様をみることができる。大きな蓮にのったものや欄干周りに優美な細工がほどこしてあるものなど、どれも個性豊かで見飽きることはない。声をかけると、「うちのお地藏さんが一番や」などと、どこでも誇らしげな声が返ってきます。お地藏様は親から子、子から孫の世代へと、受け継がれているのである。

[[舞鶴市役所『ふるさと舞タウン』 2003]。【写真13】

次に、地藏盆の調査は西舞鶴の町会役員（5箇所）と、舞鶴観光ガイド「けやきの会」で副会長をされていて、西舞鶴の歴史・民俗に明るい〔伊賀原政子氏〕の御案内・御説明を戴いた事柄等々によるものが中心である。

舞鶴の地藏盆も古くは23・24日であったが、他の地区（京都や宮津）と同様に、地藏の縁日（24日）の前の週末（土・日曜日）に行う地区が増えてきている。ただ、町内会の意向と準備する人がいる地区は、昔ながらの23・24日で「祭祀」を行っているのが現状である。

祭壇飾りの場所も、昔はその年に「新盆」の「精霊迎え」をするお宅で「地藏盆」を行っていたらしい。最近は、住宅事情等々もあり町内会館や集会所（1箇所／地区）もあるので、ほとんどの町内会では会館で行っている。

平成23年8月20日（土）に行われた、京口集会所に於ける「京口祭り」（前出の伊賀原氏の居住地）の行事準備からを時系列的にみている。

8月19日（金）13：00から、子供会と慶寿会により飾り物（祭壇の厨子や蠟燭立て等々）の真鍮磨きを行う（磨くとピカピカになるので子供達が一生懸命なので、子供の担当になっている）。同じく8月19日（金）19：30から、京口クラブにより太鼓や道具の搬出が集会場まで行われる。

祭祀当日の8月20（土）8：30から、「飾りつけ」を役員・組長・各団体役員で、「本行寺での竹切り」を会長・組長・京口クラブで、「会場設営」を役員・組長・京口クラブで行い、「祭壇や供物」を婦人会の手によって行われる。

10：00からは、小学子供会の世話で、子ども達に「おやつ」が振舞われる。15：00から、組長・京口クラブにより「提灯飾り」を、京口クラブと婦人会により「売店準備」を設営する。

18：00からは「売店を開始」して、ジュースやビール、かき氷、焼きそば、焼き鳥、当日のお楽しみスペシャル等々を売る（いわゆる縁日の売店さながらである）。20：00から、慶寿会と小中子供会による「盆踊り」が行われ、21：00に役員や参加者によって「後片付け」が行われ、地藏盆のお祭りが終る。

8月21日（日）は、9：30から最後の「後片付け」を役員・組長・各団体の方々によって行われ、10:00からは、「慰労会準備」を婦人会で行い、11：30から、役員・組長・各団体の方々による「慰労会」が行われ、平成23年度の京口地区での「地藏盆」がすべて終る。〔伊賀原氏提供の「京口祭りのご案内」〕

尚、この舞鶴市での地藏盆では、「念珠まわし（数珠くり）」等々の行事を見かけることはほとんどないと、舞鶴市以外では他の地域に類を見ない特徴として、地藏を祀る「金色の御厨子」【写真14】や、その中に安置されている「地藏菩薩立像」【写真15】が注目される。この地藏

像とは別に、普段辻角の祠に安置されている石仏の地蔵も「彩色」されて、祭壇上部に祀られる。【写真16】【写真17】（「御厨子」等々は3-2で詳述する）

3 各地域にみる「地蔵盆行事」の特徴

3-1 地蔵盆の発生と伝播

最初に、若狭湾に面した小浜・舞鶴の地蔵盆先行研究の中で、小浜市についての各先行研究としては、「地蔵盆とこども集団 - 福井県小浜市西津地区を中心にして - 」[服部 2005]、「福井県小浜市尾崎の地蔵盆 - 新たに生まれた地蔵盆行事 - 」[宇野田 2003]、「地縁的祭祀の様態三 - 福井県小浜市下根来の事例から - 」[林 1992]がある。その論考の中で共通していることは、この地区での地蔵盆の伝播・流布についての歴史的な記述である。

最初に特徴の一つとして、地蔵盆の流布・伝播について先行研究を交えて、資料・史料を引用しつつ考えてみる。

宝暦七（1757）年に書かれた『拾推雑話』には、次のような記述がみられる。

毎歳七月二十三日より四日へかけ、子供集り町の辻に有石仏に盛物をそなへて旗をたて鉦をたたき地蔵祭と云。以前より近江路には有、若狭領には曾てなき事也。正徳の頃片原町番屋腰根の石地蔵に廿三日之夜灯明をたて虚の願ほときに参るもの少々有、是より子供石仏を拾ひて此所彼所に祭りとして年々以て増長す。享保の末より盛物・作り物・桃灯など事々敷くしたて、諸人参詣賑やか也、近来まのあたり如く是]

とある。[木崎 1974：199]

また、明和四（1767）年に記された『稚狭考』の記述には

廿四日地蔵を祭る、此日を俗にうらぼんといへり。廿三日夜地蔵をまつる所、片原町・大蔵小路・新町ことに甚し。香花をそなへ、仮山水をさまへ結構す。この事三十年來次第に増長繁華す。昔は隣町又は往来の人に銭を乞て小児の祭りし事なり

とある。[板屋 1974：641]

以上の事から、「若狭での地蔵盆（地蔵祭）は、正徳年間（1711～1715）から、享保の末（1716～1735）にかけて」伝播・流布し盛んになったと記されているが、その根拠らしき史料的な記述は見当たらない。さらには「以前より近江路には有、若狭領には曾てなき事也。」とあるので、近江から伝播されたものであると考えられるが、近江に於いての地蔵盆についての史料（資料）等々に言及しての記述も見当たらない。

この事は「福井県小浜市尾崎の地蔵盆」[宇野田 2003：17]や「子ども集団と民俗社会」[服部2005：29]の先行研究で述べられている。

この伝播に関して、近江からの伝播であるというのが、各先行研究の等しく言及されているところである。しかし、その近江に於いての伝播や発生についての言及はない。この事を追求しても不毛なのか…、初学者には大きな疑問点の一つである。

林英一「地縁的祭祀の様態3」の記述から、

また下根来は小浜と京都を結ぶ街道筋に位置する村落である。一般に小浜と京都を結ぶ道としては、上中・近江今津をまわる道が鯖街道として知られているが、遠敷川を上るコース、つまり下根来ー上根来ー朽木をまわる道を、下根来では本当の鯖街道といい、昔は人の往来が多かったという。…中略…したがって宗教者が介在しなかったとしても、京都から直接流入した信仰を受容したことも考えられるのである。[林 1992: 38]

と、京都から信仰文化の伝播を推察するくだりがある。

さらに、地蔵の像容で「彩色」の習俗からの伝播を考えると、林英一『地蔵盆 - 受容と展開の様式 -』の第三章の1に「地蔵に化粧を施す」からの記述によれば、

京都市内では、地蔵盆の行事要素として、『地蔵に化粧を施す』ということが一般的に行われているようであるが、滋賀県での調査地区においては、…中略…大津市材木町、草津市元町、そして今津町今津中町だけで確認できた。[林 1997: 58-62]

と、いったような事柄を指摘しているが、その具体的な年代については不明なのであろうか、史料的な記述はない。

ここで地蔵像の彩色について少しふれると、「彩色」の習俗が「鯖街道」を通じたのであれば、琵琶湖の西湖岸で多くみられるのが自然ではないかと考える。古くから「彩色」は「京都では一般的に行われ、若狭の各地域では準備の重要な項目である」しかるに、滋賀には数える程しか見当たらない。この事については、最終章の「地蔵像容の特徴（彩色）」の項で、少し詳しく考察を加えてみたい。ここでは、伝播・流布の推察を概観するにとどめておきたい。

以上が、簡単な「地蔵盆」先行研究から発生・伝播の考察である。小稿での調査地域である、小浜・舞鶴市では「地蔵盆」に関して資料が極めて少ない。

その発生・流布・伝播過程を明らかにする根拠等々を探るのは容易ではない。

地蔵盆に特化して、尚且つ地蔵像の「彩色」も「地蔵盆祭祀」の一環として伝播を考えるならば、京都～湖西～小浜・舞鶴、京都～湖南～湖東～湖北～小浜・舞鶴と京都～丹波～丹後～舞鶴・小浜という複数のルートも考えられるのではなからうか。この事について、説得力のある合理的な資料が見当たらないが、「地蔵盆文化」の一考察として今後の課題としたい。

3-2 小浜市と舞鶴市の「地蔵盆」行事の特徴

この項では、前述（地蔵盆の諸相）と重複するが、各地域における「地蔵盆」での特徴的な事柄について、少しまとめてみたい。

まずは、祭祀の主体として、若狭各地域（小浜市・舞鶴市）では、下記の如くであった。

同じ若狭湾の周囲に位置する地域ではあるが、京都府下（丹後）の舞鶴では、京都市内と同様に町内会の役員によって、祭祀事前準備や祭りの進行等々を執り行なっているのが現在の状況である。古くには、やはり市内同様に地蔵講が主体となっていたと言う事であった。福井（若狭）県小浜市の市内も、やはり京都市内や府下（丹後）の舞鶴と同様に町内会によるものである。

しかし、小浜市の西津地区や雲浜地区は、少子化になったとは言え出来る事は子供が主体の地蔵盆祭祀である。前述の西津新小松原区火除町のように、小学6年生の女の子一人だけと言うような地区では会館の祭壇飾りや竹飾りは、町内会（婦人部）が主体で行っているが、地蔵像の彩色（化粧）はその子が行っていた。

同じく前述の、小松原区川西の仲ノ町や七軒町のように「お堂」を建てる地域では力仕事はやはり町内会で行うが、地蔵像の彩色（化粧）や供物や香華等々の祭壇飾りは、子供たちで行っていた。

さらには市内の外れで、先頭に年長者と思われる子どもが賽銭箱を持ち、後続の子ども達が、太鼓や鉦を鳴らしながら各戸に勧進して、賽銭を集めに廻るところに出会った。子ども達の集団と少し離れてその子達の親と思われる方々がついて歩いていた。これは、地蔵盆が終了後、賽銭の一部は子ども達の「お小遣い」になると言うことであった。賽銭というお金に関する事なので、大人が数名ついてしたが「勧進」と称することについては子ども達が主体であった。以下飾り付けでは、小浜市西津で「お堂」・「竹笹かざり」・「五色幡」・「大将幡」・「行灯」が他の地域には見られない特徴的なものである。これらの特徴についての資料（史料）的なものは見当たらない。

舞鶴市での特徴的なことは、祭壇飾りの最上段に祀る通称「御厨子」とか「厨子」と呼ばれるものである。この「御厨子」は「地蔵盆行事」が盛んな京都・若狭地域だけではなく全国的にも珍しく、舞鶴だけの独自の伝承であろう。

さらに「御厨子（厨子）」等々の祭壇飾りについて、もう少し簡単に見ていくことにする。旧舞鶴市（旧舞鶴は西舞鶴のこと）の地蔵盆飾りは市内全般的に同様であり、写真資料のように中央に「金色の御厨子」に「地蔵菩薩立像」が安置されて、花瓶・蠟燭立て・香炉・高坏など金色の光沢で荘厳な祭壇である。「御厨子」は地域によっては金箔仕上げで古くからの伝承である。「御厨子」以外は真鍮造りの仏具である。ちなみに、この「御厨子」の伝承は各町内で一番古くは竹屋町のもので、御厨子収納箱の蓋に「墨書で安政3年」（1890年）【写真18】と記されている。大半は明治時代からの地区が多く、例えば本町では「明治44年」、【写真19】丹波町では「明治32年」と同じく御厨子の収納箱蓋に墨書があり、他の町会の「祭壇幕」（「昭和6年」）【写真20】にも年代が染め抜かれていた。

このことから、舞鶴市では、少なくとも江戸末期には「地蔵盆」が行われていたとすることができる。しかも、旧田辺城下の西舞鶴が中心で、東舞鶴には「地蔵盆」はないということであった。さらには、「御厨子」は「地蔵菩薩立像」であり、管理はすべて町内会がおこなっている。

この「御厨子」の中に祀られているのが「地蔵菩薩立像」が他の地域にはない特徴である。さらに、舞鶴市では「数珠まわし・数珠くり」の行事はどの町会でも行われていない。

3-3 地蔵像容の特徴（特に彩色について）

最後に、若狭の「地蔵盆」での特徴の中で特筆すべき事柄の一つとして、「地蔵の彩色」があ

げられる。その中で、この各地域に伝承する事柄で、他にはあまり例をみない特徴の一つとして挙げられるのは、「化粧地藏」と称して石仏の地藏像全体に施している「彩色」であろう。

最初に、地藏像に彩色の習俗に関して唯一であろう先行研究の『化粧地藏』・「京の夏と地藏盆」からみてみると

京の町にはいたるところに地藏さんの祠がある。それもふだんはそれと気がつかないような路地の奥だったり、家と家にはさまれた…中略…たいていは石の地藏さんだが、よだれかけのほか、綿の頭巾をかむっていらっしゃることもある。三重のことが多く、全部白の綿だったり、赤と白だったり、赤、白、黄の三色だったりする。

その地藏さんを、毎年8月23、4日の地藏盆には、祠から取り出して、その年の当番の家の表の間とか、近くの空地にテントを張って設けた祭壇に移して、お祀りするのである。その時、石の地藏さんだと、洗ってさし上げたり、顔や衣紋を絵具できれいに塗り変えたりすることがある。

井上頼寿翁の『京都民俗志』にも、昭和8年(1933)に出た旧版には、「習俗」の項に「地藏尊を彩色する」という章があって「京都の街で、町内に祀る地藏尊を地藏盆に白く全体を塗り、その上へ顔や衣紋、持ち物などを描く風習がある」と書かれている。[牧田 1973:155-156]

この『京都民俗志』では「地藏尊を地藏盆に白く全体を塗り」とあるが、地藏像全体を塗るのではなく、顔の部分全体を白く塗るのである。さらには、京都では、顔を白く塗り口に紅を塗る彩色である。彩色に使用しているのは、古くは白粉や紅花であったらしいが、現在は水性絵具や油性マーカー等々様々である。尚、昨今京都ではこの彩色の習俗も、かなり少なくなりつつあるのが実態と言えるであろう。

若狭での彩色は、地藏像全体に彩色を施し、尚且つ色調も特定されず自由な色で独特な彩色方法であると言える。彩色する色も、赤・青・黄・白・黒の基本的な色の他に、金・銀・茶・紫というような色もあり、極彩色な色調もあるような派手な彩色と言える。【写真21】

彩色に使用するのは、古くは岩絵具やベンガラと言うような顔料であったが、現在では京都と同じような、絵具やペイントマーカーが主流のようである。このような派手な彩色は、舞鶴市や宮津市でも同様に見られる。

彩色は、地藏像を洗い清めた後で施すのは、京都を中心にした近接地で同様であるが、子どもが彩色する習俗が伝承・継承されているのは、この若狭の小浜西津地区だけであろう。

彩色という大きな枠組みから捉えると、各地域で行われている習俗ではあるが、その彩色の色調や方法、彩色をする主体を考えると、地藏像の彩色を「化粧地藏」と称して、現在まで伝承・継承している「若狭の化粧地藏文化」であると言っても過言ではなからう。

尚、この若狭の地藏彩色についての資料等々はなく、聞き取り調査での資料だけであるが、今後の更なる補充調査の必要性を感じた。

おわりに

2010年夏から始めた、「地蔵盆行事にみる地域的特徴」の調査研究の一編で、「若狭の地蔵盆」として、2011年の調査から、福井県小浜市と京都府舞鶴市の地蔵盆行事内容と調査・考察したその特徴的な事柄を簡単に述べてきた。浅学・初学のためと見識・調査（論証）不足の関係もあり、曖昧な表現や説明・解釈が異なる部分も随所にあると考えるが、さらに見識を深め調査を拡大・継続して「地蔵盆」の地域文化というような調査結果にしていきたい。

又、調査を重ねて行く過程で多くの疑問を感じた。その中で今後の課題として、この若狭湾に面した地域の多くは、漁港を中心にして発展をした地域である。小浜市の西津地区では古くから「地蔵盆」の伝承があり、隣の甲ヶ崎地区では「精霊（しょうらい）船送り¹⁵」が古くからの伝承とされている。少し前まで、どちらの地域でも、生業は「漁業」であった。

その事から考えると、西津の「地蔵盆」はどのような伝承過程であったのか、舞鶴市でも同様で、西舞鶴には「地蔵盆」、東舞鶴小橋地区には「精霊船」の伝承がある。小浜市とほぼ同様の形態であり、小浜・舞鶴市での年中行事で「地蔵盆」は地域において、どのような位置づけであるか探究するには難しい問題を含んでいると考える。

以上の事とは別の問題で、少子高齢化から、「地蔵盆」の伝承も時代の波（流れ）に淘汰され、「地域のコミュニティ化」とされるのではないかと考える。それは、それでよいのではあるが、「地蔵盆」が伝承された過程を考えると、以上のような難問を課題として抱きながら、さらなる「地域独自の地蔵盆文化」の調査を拡大していきたい。

【謝辞】

本稿の調査研究に際して、小浜市での情報や資料を下さった「御食国若狭おばま食文化館」学芸員の一矢典子様、御案内とお話しを伺った本村昭吾様、小浜市観光課と西津公民館の皆様、舞鶴市では、御案内とお話しをそして貴重な資料やアンケートをまとめて戴いた伊賀原政子様、郷土市史等々の貴重な史料を戴いた加藤晃様、西舞鶴連合町内会、観光商工課の皆様、紙面を借りて衷心より感謝し厚く御申しあげます。本年（平成24年）も調査を予定しておりますので、更なるご指導・ご鞭撻を宜しく御願ひ申し上げます。

参考（引用）文献

- 石川純一郎（著）『地蔵の世界』時事通信社 1995年
板屋一助（著）「稚狭考」『拾推雑話・稚狭考』福井県郷土誌懇談会 1981年
大島建彦（編）『民間の地蔵信仰』溪水社 1992年
大森恵子（著）『年中行事と民俗芸能 但馬民俗誌』岩田書院 1998年
木崎愷窓（著）「拾推雑話」『拾推雑話・稚狭考』福井県郷土誌懇談会 1981年
黒板勝美（編）『本朝世紀』－新訂増補－ 吉川弘文館 1999年
桜井徳太郎（著）『講集団成立過程の研究』吉川弘文館 1962年

桜井徳太郎（著）『日本民間信仰論』－増訂版－ 弘文堂 1970年
服部比呂美（著）『子ども集団と民俗社会』岩田書院 2010年
林英一（著）『地藏盆 - 受容と展開の様式 - 』初芝文庫 1997年
速水侑（著）『地藏信仰』塙書房 1981年
福田アジオ（編）『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館 1999年
福田アジオ（編）『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館 2000年
塩崎雪生（編）『新国訳大蔵経 諸経部2 地藏十輪経』大蔵出版 2009年
舞鶴市史編さん委員会（編）『舞鶴市史 各説編』舞鶴市役所 1975年
舞鶴市役所（企画政策室）（編）『ふるさと舞タウン』vol.9 2003年
宮津市史編さん委員会（編）『宮津市史史料編第五巻』宮津市役所 1994年

参考（引用）論文

宇野田綾子 2003「福井県小浜市尾崎の地藏盆」『西郊民俗』第182号 西郊民俗談話会
服部比呂美 2005「子ども集団と民俗社会」『伝承文化研究』第4号 国学院大学
林英一 1993「地縁的祭祀の様態3 - 福井県小浜市下根来の事例から」『近畿民俗』第134号 近畿民俗学会
林英一 2008「明治政府の近代化政策と地藏盆 - 地藏盆の成立をめぐる - 」『日本民俗学』第225号 日本民俗学会
牧田茂 1973「京の夏と地藏盆」「地藏を塗る習俗」『化粧地藏 こどもの神さま』淡交社

参照ホームページ（URL）

小浜市役所ホームページ <http://www1.city.obama.fukui.jp/>
舞鶴市役所ホームページ <http://www.city.maizuru.kyoto.jp/>

註

- ¹ 三時思想（さんじしそう）、釈尊の入滅後、正法（しょうほう）・像法（ぞうほう）・末法（まっほう）と時代が下るにつれて仏法が衰え、戦乱の世になるとする仏教的歴史観である。（日本歴史大事典）
- ² 弥勒仏（みろくぶつ）、釈迦牟尼仏（しゃかむにぶつ）に次いで仏になると約束された菩薩。兜率天（とそつてん）に住し、釈尊入滅後56億7千万年の後この世に下生（げしょう）して衆生をことごとく救済するという仏。（広辞苑）
- ³ 六道（ろくどう）、衆生（しゅじょう）が自らなした行為（業ごう）によって死後に生まれ変わるとされる6種の世界。六趣（ろくしゅ）ともいう。地獄・餓鬼・畜生・修羅（阿修羅）・人間・天上の六道がある。（日本歴史大事典）
- ⁴ 民間信仰（みんかんしんこう）教団や教理の上での組織を持たず、一般民衆によって採用さ

れている呪術宗教的信仰を指す。(民俗学辞典) また『日本民間信仰論』で、「地域社会の共同体の中において、平々凡々の生活を送ってきた民衆のあいだに成立し育成された、日常的な庶民信仰である」[桜井 1970] と述べている。以上のような「民間信仰」とは、具体的にどのようなものであろうか。調査地の「小浜市西津地区」では、「地藏盆」の古くは先祖供養とは別に、町内の安全・子どもの健やかな育成が主願として伝承されている、現在はその事に加えて、地域のコミュニティと地域おこしもふくまれていると言う事である。隣の「西舞鶴」も同様である。その為のパンフレット(地藏地図)もある。そのように時代の変化とともに「民間信仰」も変遷・変容をしていると言える。と考える。

⁵ 地藏盆(地藏盆) 八月二十三日と二十四日にかけて、京都市を中心に近畿各地で行われる地藏尊をまつるさまざまな行事。地藏盆と呼ばれ、地藏信仰のみ表面化したのは、神仏分離後の明治以降と推定できる。八月二十四日の地藏盆に、愛宕火とか万燈、地藏さんの火などと俗称される火祭が催されるのは、神仏習合時代の名残といえよう。[福田ら 1999]

⁶ 祇園祭り(ぎおんまつり) 祇園感神院(かんじんいん)の例祭。旧暦6月(現在は7月)を通じて行われる。本質は夏の御霊会(ごりょうえ)で、祇園御霊会、祇園会ともいい、京都の町衆の祭りとして受け継がれている。(日本歴史大事典)

⁷ 送り火(おくりび) 盆の終わりの日に精霊をあの世へ送り出すために焚かれる火。門口、辻、村境、墓地、水辺など一定の境目で焚く。個々の家で行うのが通例であるが、京都市如意ヶ岳の「大文字」のように組や村共同の送火もある。15日夕刻か16日、20日、23・24日の地藏盆に焚く例もある。

⁸ 限界集落(げんかいしゅうらく) 過疎などによって、65歳以上の高齢者の割合が50パーセントを超えるようになった集落。家を継ぐ若者が流出して、冠婚葬祭や農作業における互助など、社会的な共同作業が困難になった共同体。(大辞泉)

⁹ 廃仏毀釈(はいぶつきしゃく) 仏教を廃し釈迦(しゃか)の教えを棄却する意。明治政府の神道国教化政策に基づいて起こった仏教の排斥運動。明治元年(1868)神仏分離令発布とともに、仏堂・仏像・仏具・経巻などに対する破壊が各地で行われた。(大辞泉)

¹⁰ 鯖街道(さばかいどう)、かつて若狭の国(福井県西部)で獲れた海産物を京に運ぶために使われた街道の名。特に若狭の鯖が好まれたことからこの名で呼ばれたという。(大辞泉)ちなみに、京都の出町柳から八瀬・朽木を經由して小浜に至るルートと京都から琵琶湖沿岸の近江今津から上中を通る街道。

¹¹ 年齢集団の1つ7~15歳ぐらいの年齢の者が、年中行事や祭礼の際に集まって組を作り、年長者の指揮で村仕事の一部を行う。小浜市西津地区も少子化が進んで、地区(町会)によっては1人だけという地区もあり、将来的に地藏盆伝承も衰退が危惧される。

¹² 化粧地藏(けしょうじぞう) この名称の起源についての資料(史料)はないが、「化粧地藏・その出会い」[牧田:P168]の記述に、「…前略…この本の題名を『化粧地藏』としたのでは、諸国にいくつも地藏様の固有名詞として使われている例があるから、むしろ「彩色地藏」とで

も…中略…いよいよ『化粧地藏』説に従わないわけには行くまいと、覚悟を決めた。」以上のように、各地で「化粧地藏」との呼称があることに言及している。例；青森県津軽「津軽化粧地藏」、若狭小浜「若狭化粧地藏」など

¹³ 賽銭強要「但馬地方の地藏盆と地藏信仰」[大森 1998]の「1地藏盆と賽銭強要」に「…前略…八月二十三日には、道の辻の地藏さんの前に、通せんぼをして道に縄が張ってあり、この縄をとってもらい通過するためには、賽銭をださなければならなかったという。」とある。調査地の小浜市西津でも戦前は、同じような「賽銭強要」を行っていたが、戦後になって中止したらしい（西津本村氏）

¹⁴ 念仏講（ねんぶつこう）出家僧侶の読経とは別で、民間信仰（浄土系門徒）の場で念仏を唱える講中。この地域では、女性は念仏講、男性は地藏講だと言う事である。戦前までは盛行でありコミュニティ的な集まりでもあったらしい。調査地の、小浜市西津地区の「念仏講」は具体的にはよくわからない。「南無阿弥陀仏」の名号を称えるので「念仏講」ではないかと言う事であった。ちなみに「数珠繰り」の百万遍念仏でもないらしい。この地区には「数珠繰り」は行われてない。

¹⁵ 精霊船（しょうらいぶね）送り 8月15日に行われる、竹やわらで編んだ精霊船を海に流し、供養をする盆の恒例行事。若狭湾の小浜市甲ヶ崎地区や美浜市管浜地区と舞鶴市小橋地区が有名である。

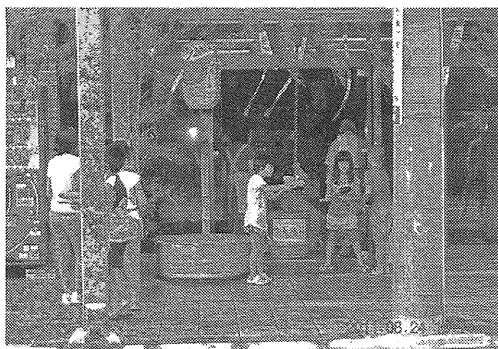


写真1 小浜市内の地藏盆

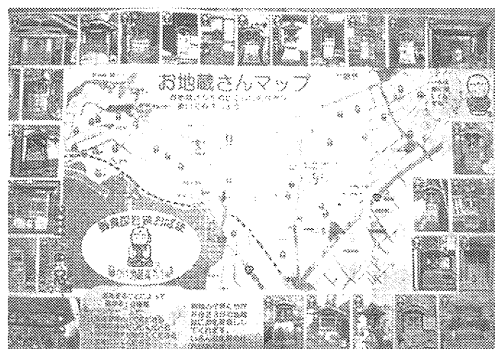


写真2 小浜市内「お地藏さんマップ」

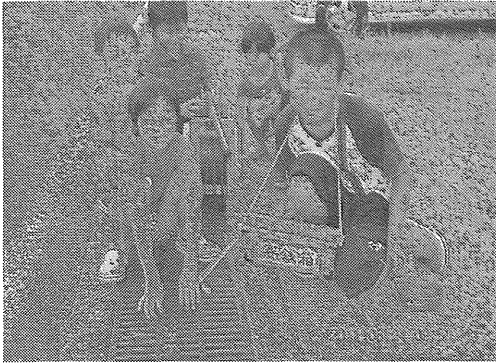


写真3 「出開・勸進の子ども達」



写真4 西津地区「お地蔵さんマップ」

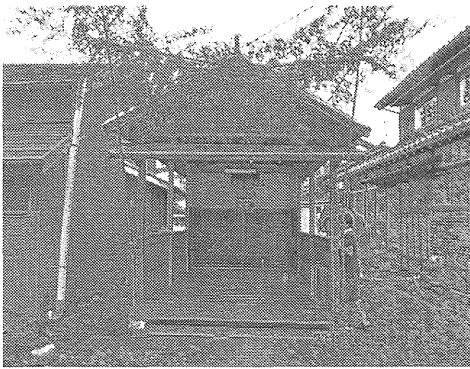


写真5 「お堂」西津地区独自の地蔵盆の建物



写真6 「五色幡」西津地区独自の地蔵盆飾



写真7 「化粧地蔵」西津地区の彩色地蔵



写真8 「男地蔵と女地蔵」西津地区独自の彩色



写真9 「行灯」西津地区独自の地藏盆飾り

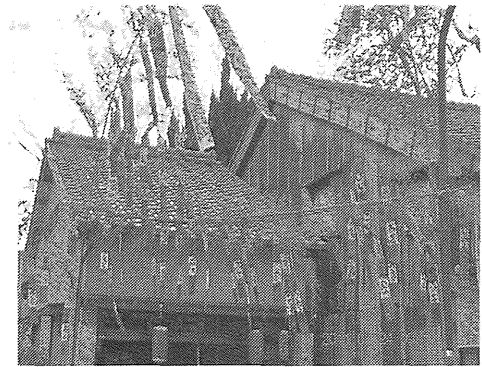


写真10 「大将幡」五色幡の最上部に取り付ける



写真11 西津地区「地藏盆」当日の子ども達

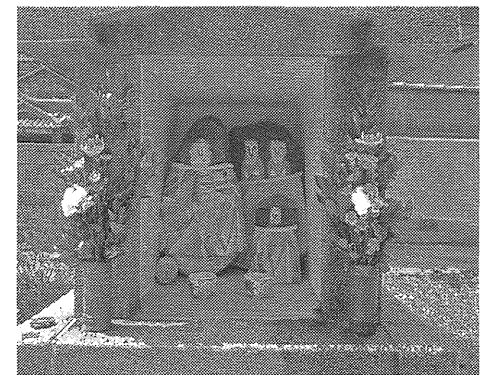


写真12 西津地区の「日常の地藏安置祠」

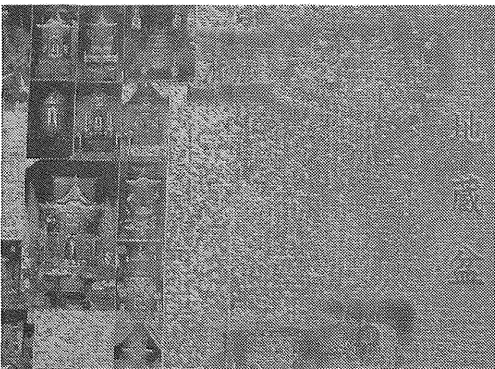


写真13 『ふるさと舞タウン』舞鶴市

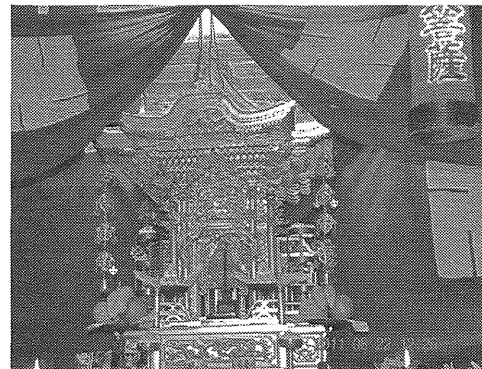


写真14 舞鶴市独自の「金色の御厨子」



写真15 舞鶴市独自の「地蔵菩薩立像」



写真16 「石仏の地蔵像」舞鶴市



写真17 舞鶴市日常の地蔵安置祠



写真18 「御厨子」収納箱蓋 年代墨書 安政3年

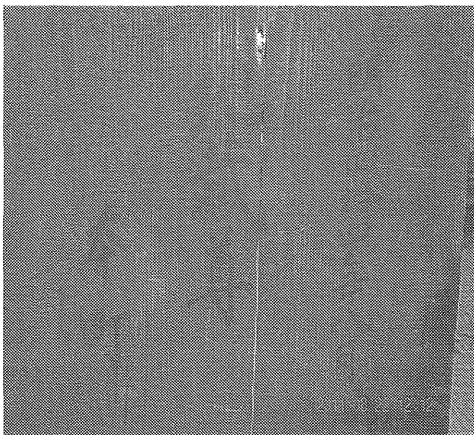


写真19 「御厨子」収納箱蓋 年代墨書 明治44年

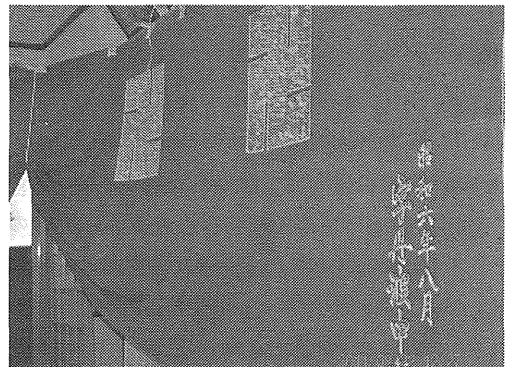


写真20 「地蔵盆祭壇幕」昭和四年染め抜き

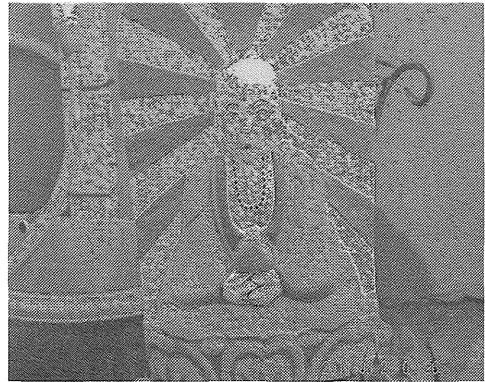


写真21 「極彩色のような彩色地蔵」

新刊紹介

山路勝彦編著

『日本の人類学—植民地主義・異文化研究・学術調査の歴史—』

本書は、国立民族学博物館において開催された共同研究会「日本の人類学史の研究」(2007. 10~2010. 3)の成果である。13回、33人の発表により坪井正五郎以後、民博誕生以前までが対象とされた。編者・山路は、人類学者が時代にどのように向き合ってきたかの検証に主眼を置いたという。辛亥革命100周年の昨年、台湾行において、金閔丈夫・馬淵東一・鹿野忠雄・国分直一らが博物館提示において顕彰されているのに接し、日本の人類学に対する海外評価の一端に触れた。驚咳に接した、国分の文庫が台湾大学図書館に設けられているのには感慨を深くした。

3部構成の大冊の目次だけをここでは紹介しておく。山路による「日本人類学の歴史的展開」に続き、一部：植民地における人類学、「台湾原住民研究の継承と展開」(宮岡真央子)、「植民地朝鮮の日本人研究者の評価」(朝倉敏夫)、「朝鮮総督府調査資料と民族学」(崔吉城)、「南洋庁の民族学的研究の展開」(飯高伸五) 二部：異文化の記述と方法、「近代日本人類学とアイヌ・コロボ

ックル人種表象」(関口由彦)、「土方久功は“文化の果”に何を見たか」(三田牧)、「馬淵東一と社会人類学」(山路勝彦)、「マルクス主義と日本の人類学」(中生勝美)、「モノを図化すること」(角南聡一郎) 三部：戦後人類学の再建と発展、「民族学から人類学へ」(三尾裕子)、「米国人類学者への日本人研究者からの影響」(谷口陽子)、「東京大学文化人類学教室のアンデス考古学調査」(関雄二)、「探検と共同研究」(田中雅一)、「日本人類学と視覚的マスメディア」(飯田卓)、「“靖国問題”研究と文化人類学の可能性」(波平恵美子) 特別寄稿：杉浦健一遺稿講演集(堀江俊一・千加子)の構成で、巻末には人名・事項の詳細な索引が付される。なお、『民博通信』128・130号にはこの共同研究に係るエッセイが掲載されている。日本民族学会編『日本民族学の回顧と展望』(1966)を合わせ読むことによりこの100年の日本の人類学が跡付けられる。

(佐野賢治)

A5判 774頁 関西学院大学出版会
2011年8月刊